ふるさと歴史館第８回企画展

常陸国分寺
東国の大寺

常陸国分寺復元模型（石岡市立ふるさと歴史館）

平成 28 年

6 月 1 日（水）▶ 8 月 28 日（日）

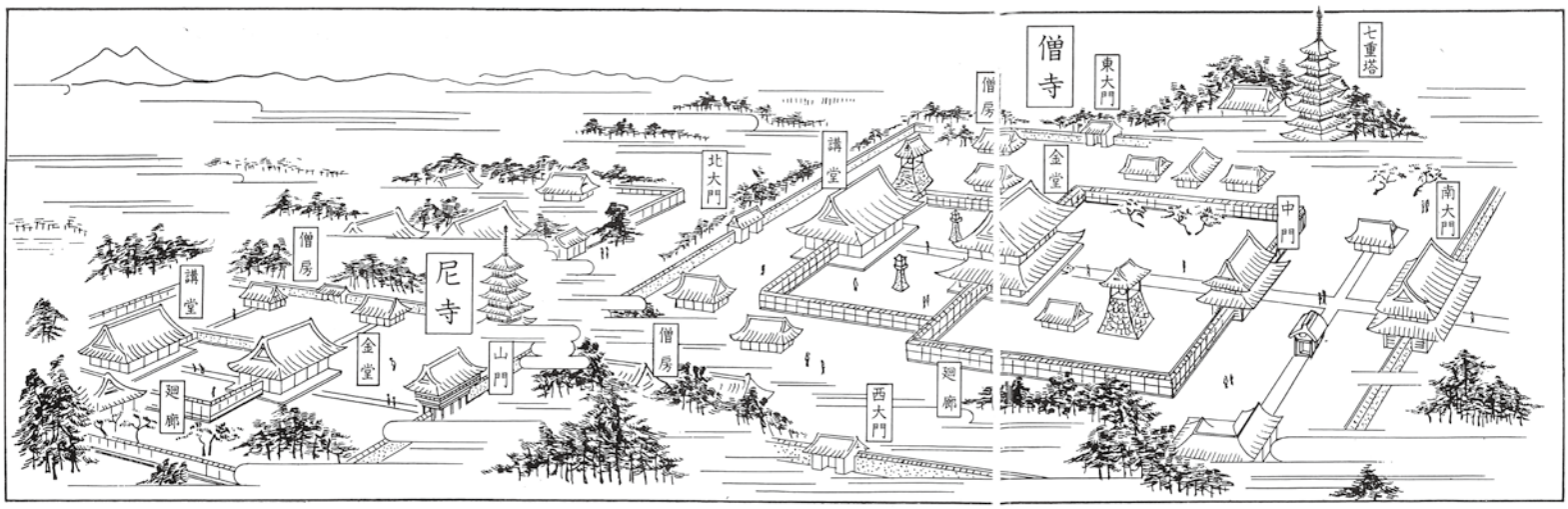
入館無料 / 月曜休館（祝日の場合は翌日）

午前 10 時～午後 4 時 30 分

展示解説　6 月 4 日（土）
午前 10 時 30 分～11 時
直接ふるさと歴史館にお集まりください。

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社 1-2-10　石岡小学校敷地内
電話 0299-23-2398



常陸国分寺復元図（今泉雪耕画，『図説石岡市史』1961 年より）

国分寺を建てよ——聖武天皇の決断

聖武天皇は、第45代天皇として724年2月に即位しました。しかし、その年3月には、陸奥国で反乱が起き、国府の役人が殺害されてしまいました。また、727年に生まれた待望の皇子は、翌年に亡くなってしまいます。さらに、地震や凶作のための飢饉、伝染病の流行が相次ぎます。737年の伝染病の大流行では、都の貴族も多数が死亡し、朝廷が一時機能しなくなるほどでした。そして740年には、従弟の藤原広嗣による反乱も発生します。乱自体は治めたものの、地震、疫病、飢饉、反乱と度重なる混乱・不安に対し、聖武天皇がとったのは、「仏頼み」—仏教の力によって国を治めることでした。

▲ 聖武天皇
（『皇室の名宝展—御即位10年記念特別展—』NHKより）

737年には釈迦像の造立を、740年には法華経10部の書写と七重塔建立を諸国に命じていましたが、その総決算ともいうべきもののが、741年2月14日の「国分寺建立の詔」であり、743年11月5日の「盧舎那仏造立の詔」でした。

▲ 盧舎那仏「奈良の大仏」（奈良市東大寺）

国分寺建立の詔（現代語訳）『続日本紀』天平十三年（741）三月乙巳（二十四日）の条（※1）

「私は徳の薄い身であるのに、おそれ多くも天皇という重い任務を受けている。しかし、民を導く良い政治を広めることができず、寝ても目覚めても恥ずかしい気持ちでいっぱいだ。昔の賢い君主は、みな祖先の仕事をよく受け継ぎ、国家はおだやかで無事であり、人びとは楽しみ、災害はなく幸福に満ちていた。どうすれば、このような政治ができるのであろうか。この数年は、凶作がつづき伝染病が流行している。私は恥かしさとおそろしさで自分を責めている。

そこで、万民のために大きな幸福を求めたい。以前（天平九年十一月）、各地の神社を修造させたり、諸国に丈六（一丈六尺＝約４．８ｍ）の釈迦牟尼仏一体を造らせるとともに、大般若経を写させたのもそのためである。おかげで、今年は春から秋の収穫の時期まで風雨が順調で五穀も豊かに稔った。これは、誠の心が伝わったためで、神霊のたまわりものである。その霊験はまったくおそろしいほどである。金光明最勝王経には『もし広く世間でこの経を読み、敬い供養し、広めれば、われら四天王は常に来てその国を守り、一切の災いもみな取り除き、心中にいだくもの悲しい思いや疫病もまた消し去る。そしてすべての願いをかなえ、喜びに満ちた生活を約束しよう』とある。

そこで、諸国にそれぞれ七重塔一基を敬って造り、併せて金光明最勝王経と妙法蓮華経を各十部ずつ写経させることとする。私もまた、金文字で金光明最勝王経を写し、塔ごとに一部ずつ納めたいと思う。これにより、仏教の教えが大空・大地とともにいつも盛んに続き、仏のご加護が現世でも来世でも常に満ちることを願う。

七重塔を持つ寺（国分寺）は「国の華」であり、必ず良い場所を選んでまことに長く久しく保つようにしなければならない。人家に近いときは悪臭が漂うような所ではよろしくないし、遠いときは集まる人を疲れさせてしまうようでは望ましくない。国司は国分寺を荘厳に飾り、いつも清潔に保つように努めなさい。間近で仏教を擁護する神々を感嘆させて、神仏が進んでこの国を守護してくださるようになってほしいのだ。全国にあまねく布告を出して、私の思っていることを知らせなさい。」

〈条文〉

第一条　国毎の僧寺（国分僧寺）には、寺の財源として封戸を五十戸、水田十町を施し、尼寺（国分尼寺）には水田十町を施しなさい。

第二条　僧寺には必ず二十人の僧を住まわせ、その寺の名は金光明四天王護国之寺としなさい。また、尼寺には十人の尼を住まわせ、その寺の名は法華滅罪之寺としなさい。二つの寺は距離を置いて建て、僧尼は教戒を受けるようにしなさい。もし僧尼に欠員が出たときは、直ちに補充しなさい。毎月八日には、必ず最勝王経を読み、月の半ばには戒と羯磨（※2）を誦えなさい。

第三条　毎月の六斎日（八・十四・十五・二十三・二十九・三十日）には、魚とりや狩りをして殺生をしてはならない。国司は、常に監査を行いなさい。

※1　続日本紀には「三月」とありますが、天平十九年十一月の督促の詔では「二月」とあり、そのほかの文献でも「二月」であることから、「二月二十四日」が正しいと考えられています。

※2　戒（かい）と羯磨（かつま）
戒とは仏教信者が守るべき規律のことで、在家信者は普段は５つ守ればよいのに対し、正式な僧は２００以上も守らねばなりませんでした。また、羯磨とは仏教教団の運営に必要な議事や儀式の作法、およびそれらをまとめたテキストのことです。これらを読み上げさせることにより、僧尼が違反をしていないかどうか、確認と反省をさせる意味がありました。

参考文献　『国分寺建立の詔　武蔵国分寺跡資料館解説シートNo.2』２０１６年３月

進まない工事―聖武天皇怒りの督促

聖武天皇は盧舎那仏像（大仏）造像に力を注いでいました。国分寺造営工事は各国それぞれ進められていたと考えていたのでしょう。しかし、金文字の金光明最勝王経の書写がほぼ終わった746年になっても、多くの国で工事の進捗状況ははかばかしくなかったようです。そのことを知った天皇は、747年11月、督促の命令を出します。

「しかるに諸国の司等怠緩して行わず」（諸国の国司たちは怠けていて事を進めていない）、「朕が股肱、豈此の如くなるべけんや」（お前たちは私の忠実な臣下といえるのか）と厳しいことが並び、3か年以内の完成を求めています。天皇の怒りと、これを読んだ国司のあせりが目に見えるようです。

この怒りの督促を受けて、各国の造営は本格化します。しかし、756年に聖武太上天皇が亡くなると、翌年の一周忌のために、本尊の釈迦仏の造立と金堂の造営が督促されていることから、各国の完成はこの頃まで待たなければならなかったようです。

各国の国分寺の創建は以下の4期に分けられます。

① 738～740年　構想段階　← 737年・740年の命令
② 741～747年　着手段階　← 741年 国分寺建立の命令
③ 747～755年　本格化段階　← 747年 督促の命令
④ 756～760年代　完成段階　← 756年 聖武太上天皇崩御

建立の命令が出されると直ちに自前で工事にとりかかった国、工事が遅れていたために中央から技術者の派遣を受けた国、それらの国で養成された技術者の派遣を受けた国など、各国の事情―国司の苦悩をうかがうことができます。

国分寺造営督促の詔

『続日本紀』天平十九年（747）十一月己卯の条

○己卯。詔曰。朕以去
天平十三年二月十四日。至心發願。欲使國家永固。聖法恒修。遍詔天下諸國。國
別令造金光明寺。法華寺。其金光明寺各造七重塔一區。并寫金字金光明經一部。
安置塔裏。而諸國司等怠緩不行。或處寺不便。或猶未開基。以爲。天地災異一二顯
來。蓋由茲乎。朕之股肱豈合如此。是以。差從四位下石川朝臣年足。從五位下阿
倍朝臣小嶋。布勢朝臣宅主等。分道發遣。檢定寺地。并察作狀。國司宜與使及
國師。商定勝地。勤加營繕。又任郡司勇幹堪濟諸事。專令主當。限來三年以
前。造塔金堂僧房。悉皆令了。若能契勅。如理修造之。子孫無絶。任郡領司。
其僧寺尼寺水田者除前入數。已外。更加田地。僧寺九十町。尼寺四十町。便仰所司
墾開應施。普告國郡。知朕意焉。

「自分は天平十三年二月十四日に国分二寺造営の詔を出し，そのことについては国司たちによく理解してもらったはずである。しかるに諸国の国司たちは怠けていて事を進めていない。国分寺が出来上がっていないから，災害も一再ならずやってきたではないか。それでもお前たちは私の忠実な臣下といえるのか。今から石川年足等三人の者を派遣して，各国での工事の状況を検分させるから心して待つように。もしお前たちの力だけでは足りないのであれば，郡の役人たちの中から優れた者を選んで工事を援けてもらえ。以後三か年以内に造り終えよ。このことに協力した郡司たちは，末代まで郡の役人として取り立ててやろう。なお，国分二寺造営料として僧寺には九十町，尼寺には四十町の田を加えよう。私の意志をよく理解してしっかりやるように。」

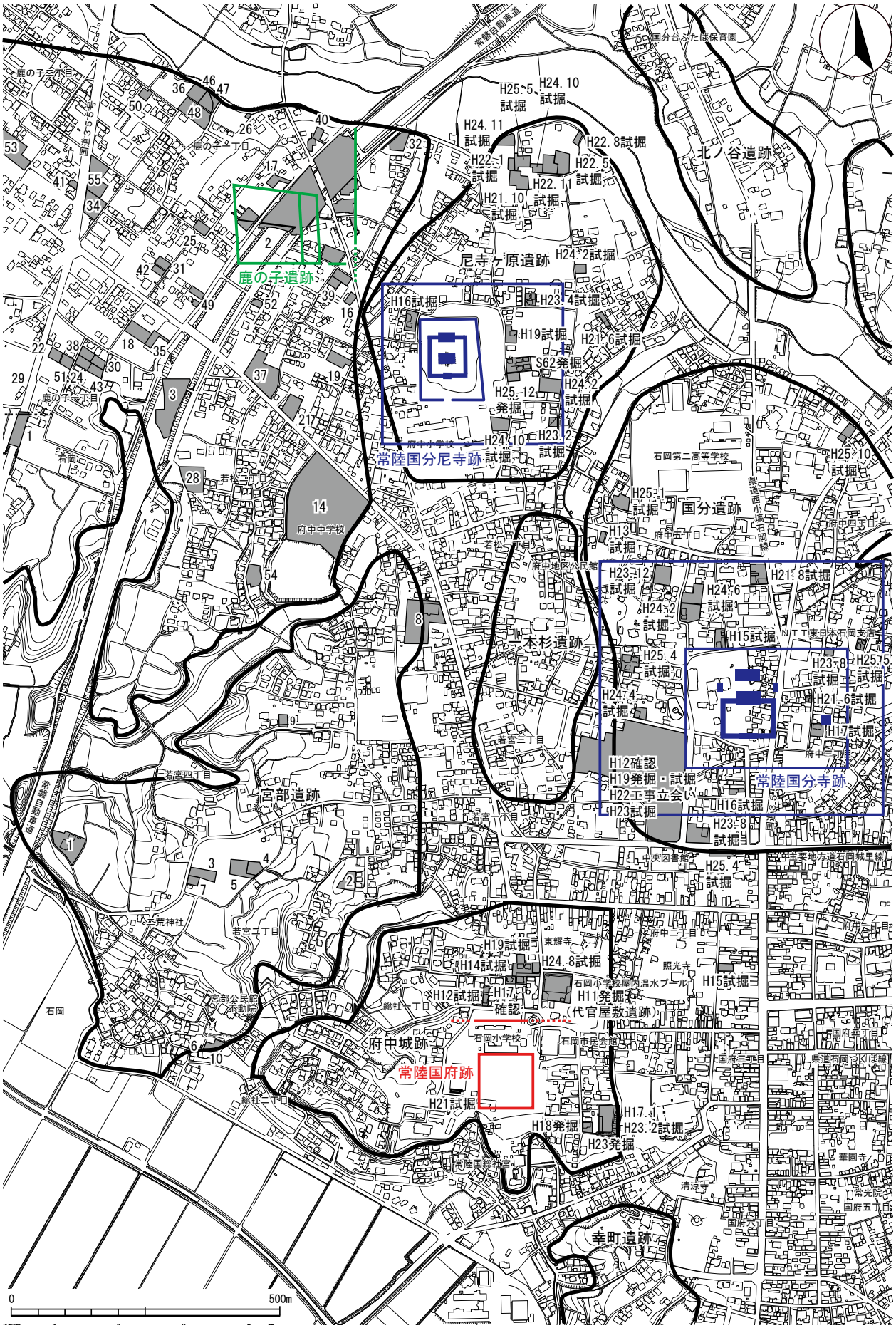
参考文献　森　郁夫・甲斐弓子『僧寺と尼寺』２０１２年３月

常陸国分寺

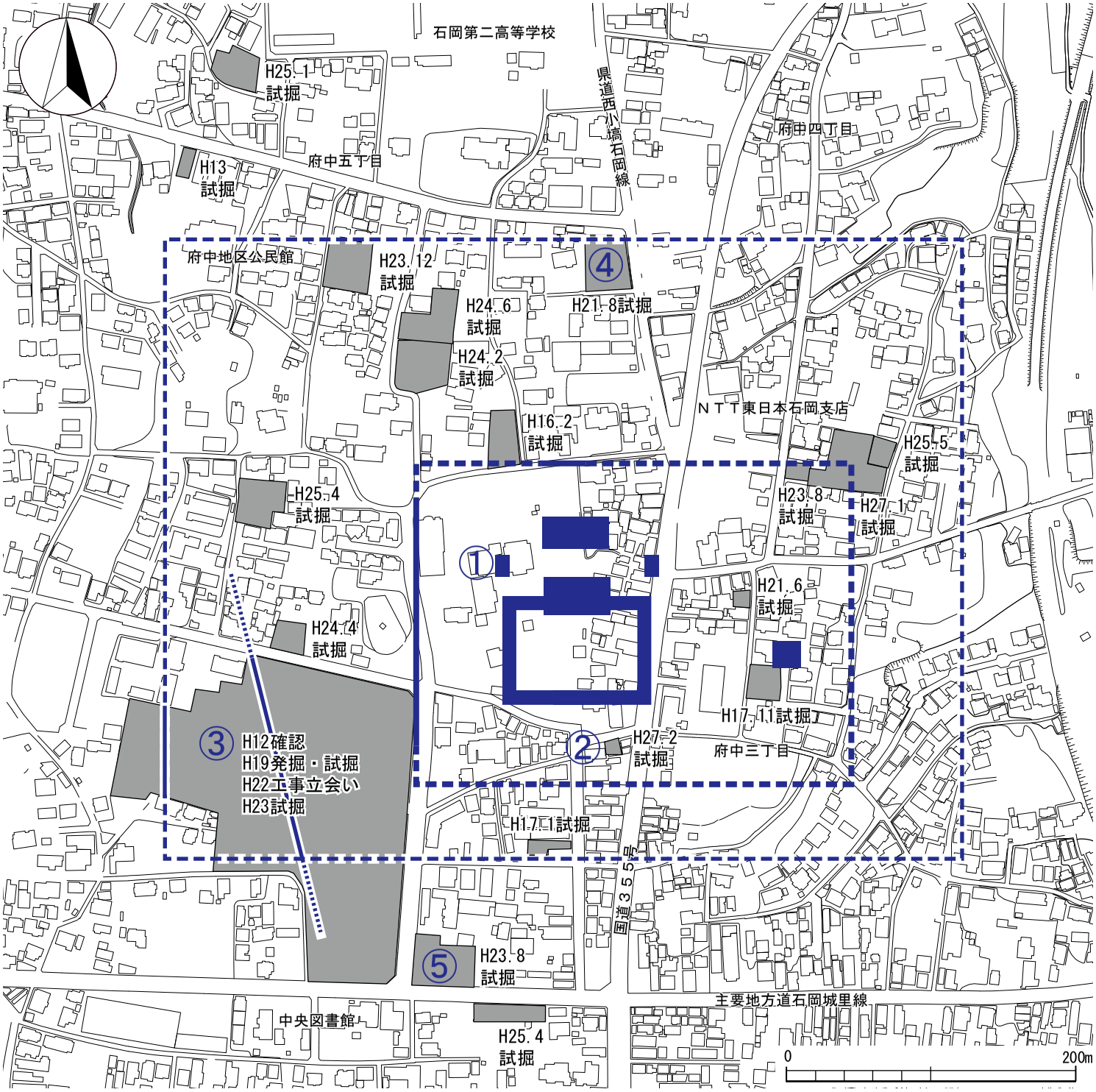
常陸国の国分寺は石岡市府中5丁目、国分尼寺はその北西の若松3丁目に建立されました。

場所の選定にあたって「国分寺建立の詔」では、「国の華」であることから、「好処」（良い場所）を選ぶように命じています。「人家に近いと異臭がするかもしれない、あまり遠いと人々の参拝がない」―選定を任された国司は迷ったことでしょう。国分寺と常陸国府―現在の石岡小学校・ふるさと歴史館―の直線距離は800m余り。そのほか、交通の便や、災害の恐れのないことなどが勘案されたのでしょう。

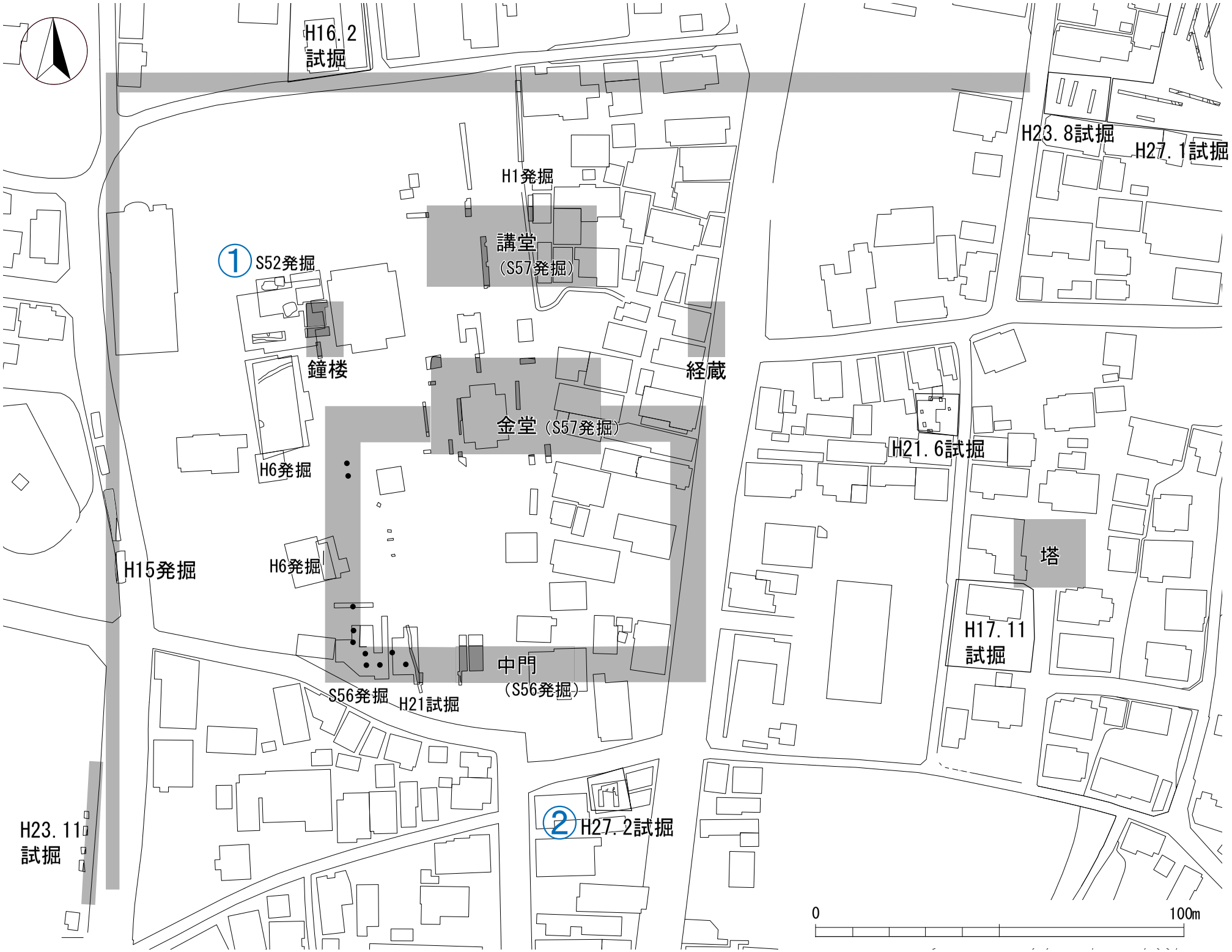
常陸国分寺は、礎石の残りが良好なことから、制定されて間もない「史蹟名勝天然紀念物保存法（大正8年）」に基づき、大正11年（1921）10月に国から史跡に指定されました。そして、昭和27年（1952）3月には「特別史跡」に指定されました。特別史跡とは、「史跡のうち学術上の価値が特に高く、わが国文化の象徴たるもの」であり、全国で61件だけ。遺跡の「国宝」にあたります。


鹿の子遺跡
尼寺ヶ原遺跡
北ノ谷遺跡
常陸国分尼寺跡
国分遺跡
本杉遺跡
宮部遺跡
常陸国分寺跡
府中城跡
常陸国府跡
幸町遺跡
府中中学校
石岡第二高等学校
国分台ふたば保育園
NTT東日本石岡支店
中央図書館
石岡小学校
石岡市民会館
常陸国総社宮
清涼寺
0
500m

▲ 常陸国分寺　位置図



常陸国分寺　寺院地推定図

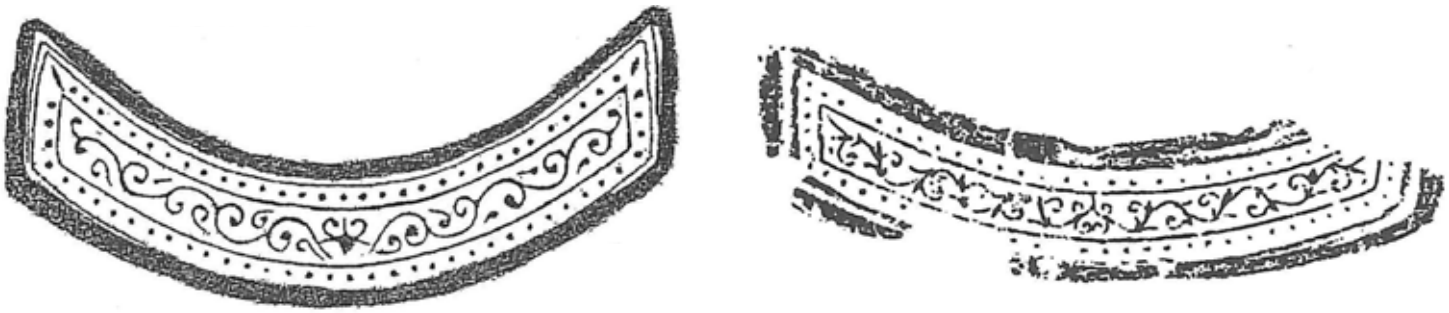


常陸国分寺　伽藍地推定図

創建年代

常陸国分寺の堂塔には、瓦が葺かれていました。一般の住まいは竪穴住居であった時代、驚きをもって迎えられたことでしょう。

軒先には文様のある瓦—軒丸瓦（鐙瓦）・軒平瓦（宇瓦）が飾られていました。創建期と考えられる軒平瓦は、平城京大安寺でおもに出土するもの（「大安寺式」）と似ており、モデルにして作られたと考えられています。「大安寺式」が主体的に生産されるのは、747～757年。ということは、常陸国分寺の創建も、そのころということになります。聖武天皇の怒りの督促の命令は747年。常陸国でもそれを受け、あわてて造営にかかったのでしょうか。



▲ 常陸国分寺創建期の軒平瓦（右）とその祖形と考えられる瓦（平城京大安寺式）

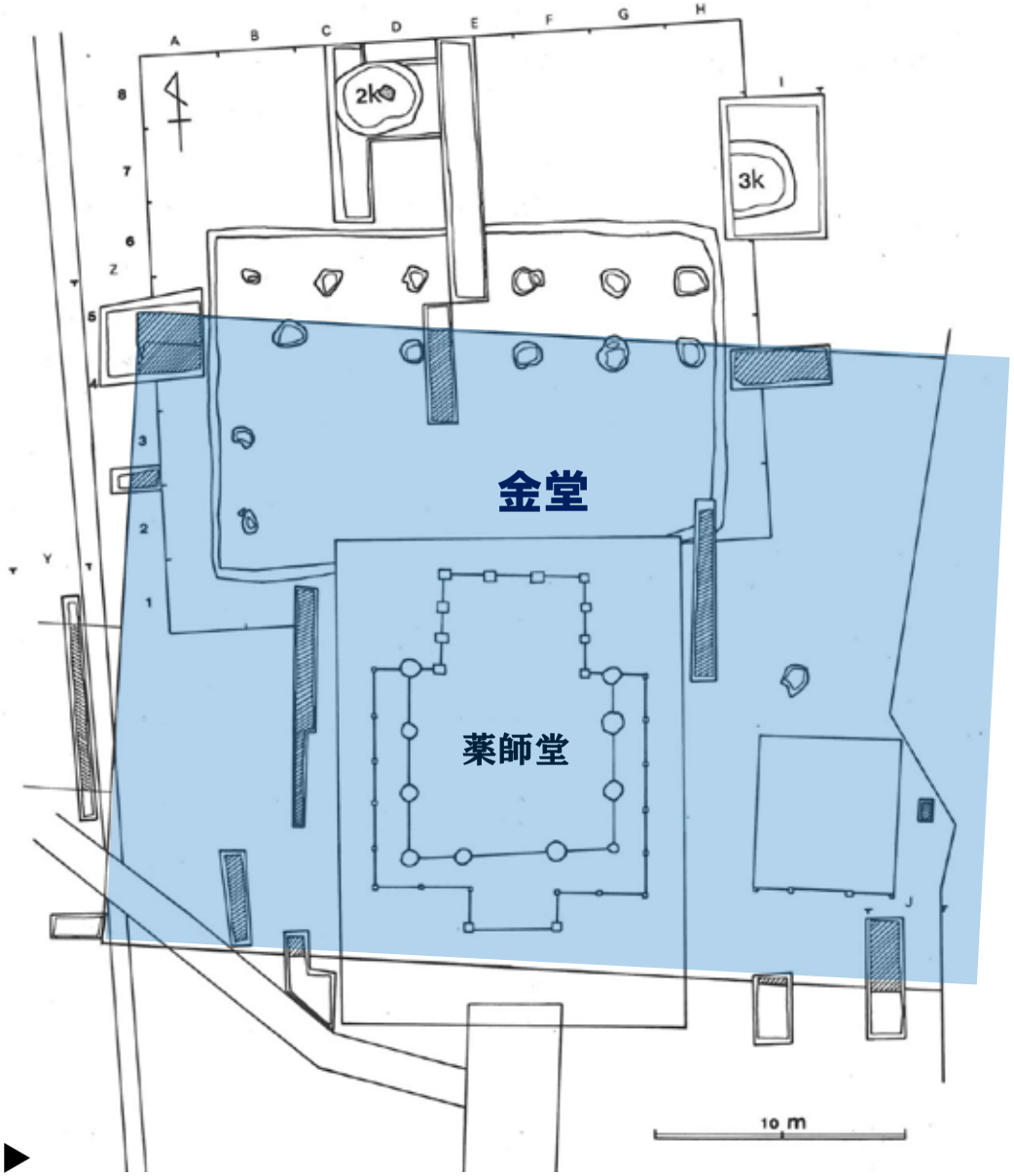
また、752年には百済王敬福が常陸守（国司の長官）に任命されています。敬福は滅亡した朝鮮半島の国家・百済の王族の子孫で、朝鮮半島出身の技術者集団を率いていたと考えられます。兄弟の孝忠は、738年・741年に遠江守に任命されており、遠江国分寺造営を担いました。敬福も、陸奥守在任中には、大仏に塗るための聖武天皇念願の黄金を発見していることから、その集団の技術力の高さがうかがえます。敬福は常陸国守になる前後に、陸奥（東北）、上総（千葉県中央部）、出雲（島根県）、讃岐（香川県）の国守を歴任しています。「国分寺請負人」とでもいうべき国守だったのかもしれません。

金堂

金堂は、本尊仏を安置する建物です。現在の薬師堂北側にある南北約14m、東西約20mほどの低い基壇がその跡と考えられ、礎石が13個残されています。

しかし、昭和57年（1982）に発掘調査を行ったところ、現在の基壇は後世のもので、金堂はそれよりも南にずれた薬師堂を中心とした位置にあったことがわかりました。その規模は、南北26.2m、東西は住宅地となるため追跡できませんでしたが、33m以上あることがわかりました。

南北26.2mという規模は、全国最大級の規模を誇る武蔵国分寺の金堂と同じです。武蔵国分寺の東西規模は45.4mであり、常陸国分寺も同程度の規模と考えられます。



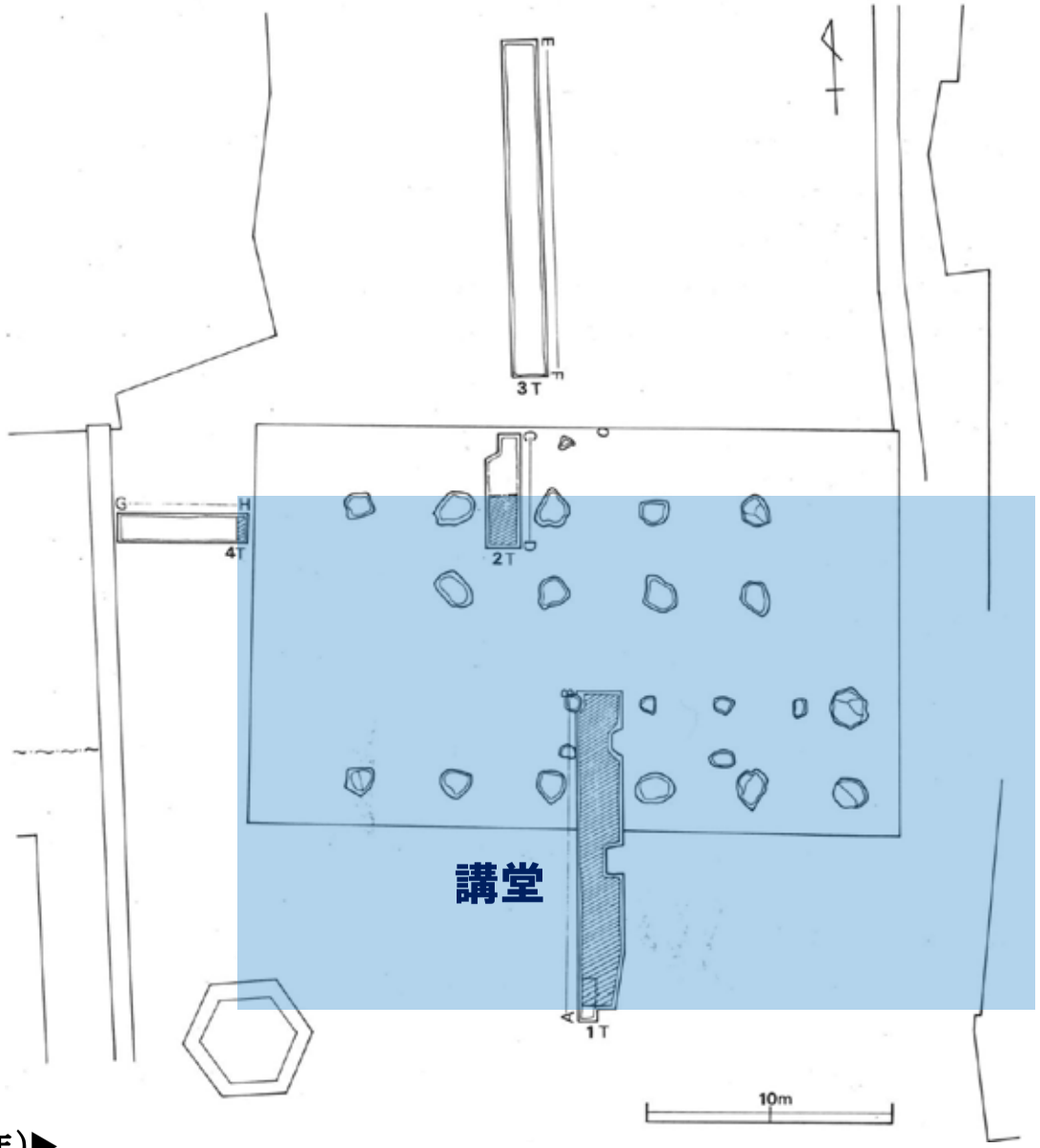
金堂の調査状況図（昭和57年）▶

講 堂

講堂は、経典の講義などが行われる建物です。金堂基壇の北側にある南北約16m、東西26mほどで、大小22個の礎石が並んでいる低い基壇がその跡と考えられていました。

しかし、昭和57年(1982)に発掘調査を行ったところ、この基壇も後世のもので、講堂の位置は南側にずれることがわかりました。礎石はこの後世の礎石の上に置かれていることから、他所からこの場所に移され、並べられたものと考えられます。なかでも小型の礎石6個は、もとは回廊のものでしょうか。

規模は、南北約22mで、東西はやはり住宅地となるため追跡できませんでしたが、金堂と同規模の45m程度と考えられます。



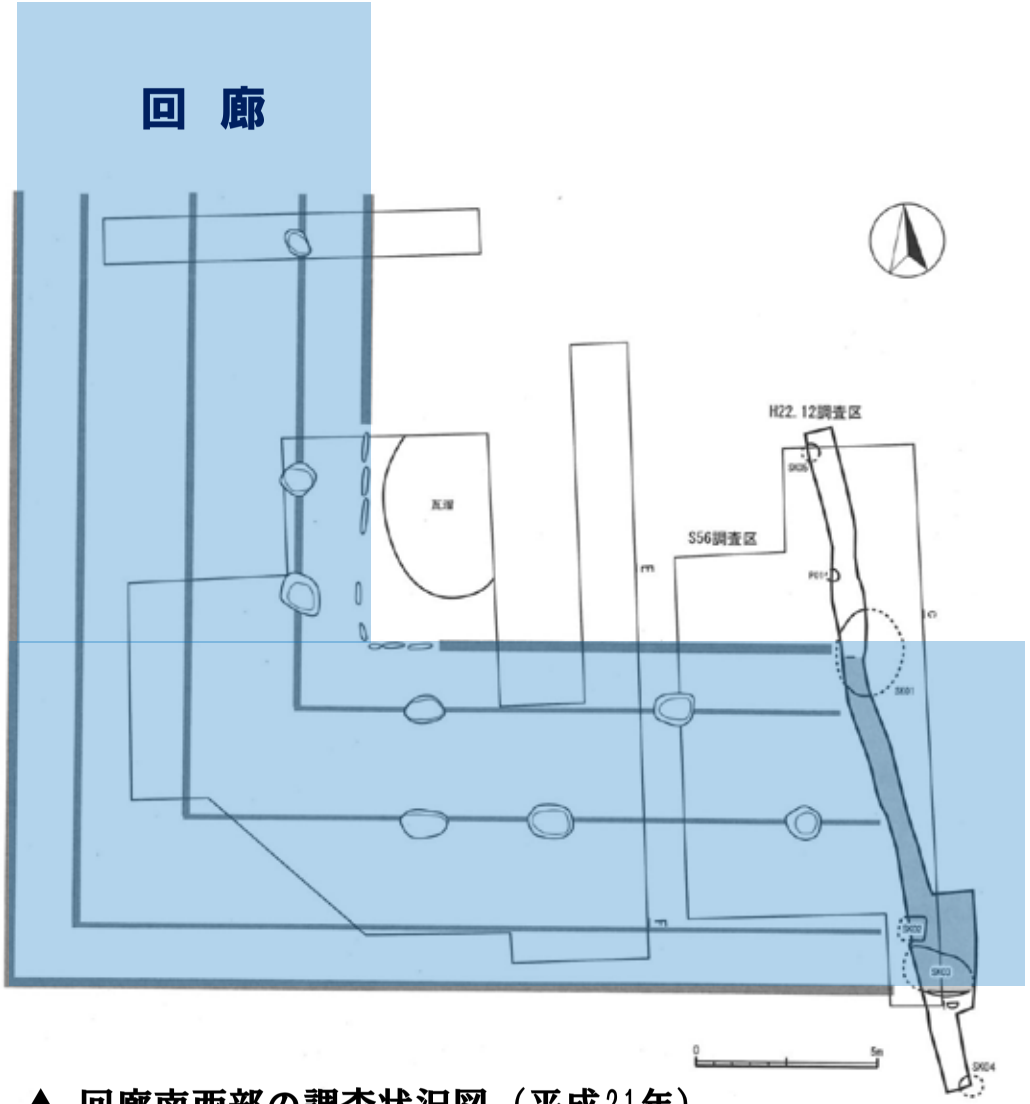
講堂の調査状況図（昭和57年)▶

回 廊

回廊は、中門（仁王門礎石の北側）と金堂とをつなぐ「渡り廊下」です。回廊南西部には礎石や、端に埋め込まれた羽目石の一部が当時のまま残っています。

平成21年（2009）に、塀建設に伴い発掘調査を行ったところ、回廊の幅は9.3mと広く、「複廊」であることがわかりました。複廊とは、中央に間仕切りのある「２車線道路」で、規模が大きくなるため、建設に必要な費用や作業量も多くかかることになります。

全国の国分寺で複廊なのは、１割程度しかありません。総国分寺である奈良県東大寺も創建時は複廊であり、全国のなかでも格の高い国だけに許されたものなのかもしれません。



▲ 回廊南西部の調査状況図（平成21年）

塔

現在の国分寺境内、千手院山門の右手前に写真のような巨石があります。直径2mで、中央には20cm程度の穴があいています。この石は、常陸国分寺の七重塔の心礎—塔の中心の柱の礎石です。

この石が発見されたのは昭和27年。泉橋近くの豪商邸の庭石となっていました。その前には　国分町の邸宅内にあったようですが、もとはどこにあったのか—塔はどこに建っていたのかは、残念ながらわかっていません。

▲ 塔の心礎

それを探る手がかりに、地名があります。現在の国分寺の東約150mの住宅地のなかに、「ガラミドウ（伽藍御堂）」と呼ばれる場所があります。昭和はじめころの写真には礎石らしき石が並んでおり、軒丸瓦も採集されています。しかし課題もあります。それは軒丸瓦は9世紀後葉以降のものが中心で、創建期のものはありません。聖武天皇の命令では、塔を一番最初に造ることになっています。とすると、「ガラミドウ」の地に建っていたのは再建された塔で、創建時のものはまた別のところにあったのかもしれません。

伽藍地の区画施設

金堂、講堂などが建つ中心部「伽藍地（がらんち）」は、溝で区画され、その内側には塀がめぐっていたようです。

国分寺の西側、弁天池脇で発掘した溝は、幅1.4m程度でしたが、断面が逆台形をした深い溝から、かまぼこ形をした浅くて広い溝へと掘り返し―溝さらいが行われていました。その時期は、８世紀後半～９世紀前半と考えられます。

それが、９世紀第３四半期（876～900）になると、塀から崩落したような状態で瓦が出土しています。878年には大地震（元慶地震（がんぎょう））が起こり、相模国分寺では本尊などが破損し、地震直後の火災で焼失したとの記録があります。常陸国分寺でも被災したのでしょうか。その後、溝は掘り返されることなく、埋められています。区画施設はなくなり、伽藍のみが維持管理されていたと考えられます。

▲ 伽藍地を区画する溝（平成15年発掘）

伽藍地の規模

区画溝が発見されているのは、西辺と北辺のしかも一部だけ。そのため、伽藍地の規模を確定するには、該当する部分の調査が待たれていました。

平成23年（2011）８月、個人住宅の建設に伴い、北辺の区画溝の延長部分を調査する機会にめぐまれました。調査にあたっては、幅1mの調査区を南北方向に3本設定し、区画溝の続きの発見に努めました。しかし、どの調査区でも溝の続きを発見することはできませんでした。

となると、この地点まで区画溝は続いていなかったと考えることができます。この地点は、「ガラミドウ」の真北にあたり、ガラミドウが塔であれば、伽藍地には含まれるべきところになります。

「ガラミドウ」に建っていたのは9世紀中葉以降の再建された塔では、という説を紹介しました。また、伽藍地の区画溝は、9世紀第3四半期（876～900）には埋められています。つまり、「ガラミドウ」が再建塔だとすると、それに伴う伽藍地には区画溝は存在しないことになります。果たしてこの推理は正しいのか、周辺のさらなる調査にご期待ください。

▲ 伽藍地の区画溝延長部分の調査（平成23年8月試掘）

創建期の住居

平成27年(2015)２月、現在の国分寺の南側、伽藍地の想定地のなかで、個人住宅の建設に伴い試掘調査を行いました。すると、奈良時代の竪穴住居跡を発見しました。

なぜ伽藍地という中心部のなかに、一般の住まいである竪穴住居が存在していたのでしょうか。

それを考える手がかりに、住居の年代があります。常陸国分寺が創建されるのは、747～757年頃。発見した住居からは、そのころの土器が出土しています。ということは、住居が使用されていたのは、国分寺の建設が始まったころということになります。国分寺の建設工事にあたった人々の住まい—その可能性が考えられる住居の発見です。

創建期の住居跡（平成27年2月試掘）▶

寺院地

「伽藍地」の周辺には、修繕に関わる施設や、下働きの人がいた施設、花畑や畑など国分寺に関係する施設などが広がっていると考えられています。これを「寺院地（じいんち）」と呼んでいます。

常陸国分寺では、寺院地も溝で区画されており、その規模は1辺500m前後。最大規模と言われる武蔵国分寺に匹敵する大きさです。発掘調査が行われたイベント広場の様子を見ると、国分寺が完成した8世紀後半頃から竪穴住居が作られ、11世紀頃まで継続しています。特徴的なのは、土器に文字が書かれた「墨書土器」や当時のブランド品である施釉陶器の出土量の多さ。国分寺との密接な関係を物語っていると言えます。

寺院地の発掘調査（平成19 年発掘）▶

これからの常陸国分寺 ―保存と活用

常陸国分寺の年間予算は「6万束」（稲の束数）で、他国の「4万束」に比べ、多額の予算が組まれていました。そして、今回の展示で見てきたように、全国で最大級の規模を誇っていました。

しかし、まだわからないこと―課題も多く残っています。広大な伽藍地は国道355号線によって分断され、東側については、塔の場所をはじめ、不明なことばかりです。

常陸国分寺の学術調査は昭和57年（1982）が最後で、それ以後の調査は、道路建設や住宅建築といった開発に伴う調査となっています。「受け身」とも言える調査でしたが、その調査による成果は、今回の展示でご紹介したとおりです。

石岡市教育委員会では、今年度、伽藍地内の確認調査を34年ぶりに実施する計画でいます。また、来年度からは、これからの常陸国分寺の保存・活用の指針となる「保存管理活用計画」の策定も予定しています。これらの調査、計画策定を行うことで、常陸国分寺の実像を明らかにするとともに、遺跡の国宝たる「特別史跡 常陸国分寺跡」のこれからの姿を考えていきます。その状況は随時お知らせしたいと思いますので、ぜひみなさんのご意見をお寄せください。

花まつりでにぎわう国分寺 ▶

◀ 金堂跡北西コーナー
調査風景（昭和57年）

回廊跡掘込地業 ▶
（平成21年）

石岡市立ふるさと歴史館 第8回企画展

常陸国分寺 ―東国の大寺

平成28年6月1日発行

編 集　石岡市教育委員会 文化振興課
〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1
発 行　石岡市立ふるさと歴史館
〒315-0016 茨城県石岡市総社1-2-10